【寄稿】

特集：言語教育学としてのライフストーリー研究

わからない原因を考える
ライフストーリーのより深い理解に向けて

中山　亜紀子*

概要

日本語教育学では，ライフストーリーを使った研究への関心が高まっているが，インタビューすればいつでもストーリーが書けるわけではない。本稿では，筆者の失敗したケースを取り上げ，インタビューの内容がわからず，ストーリーが書けなかった原因について考察した。本稿では，筆者が調査協力者の背景を十分に理解していなかったこと，ストーリーの作成方法の問題，さらに調査協力者が語れなかった可能性の3点について論じた。

キーワード

ライフストーリー，学部留学生，自己物語，マスターナラティブ，ラポール

1. はじめに

言語学習者の学習体験や，第二言語を使った生活についての語りから，多くのことが学べることが分かっている（Norton，2000；Nunan & Choi，2010；ほか）。学習者自らが記した自伝的な著述ばかりではなく，ライフストーリーやエスノグラフィからは，言語学習が学習者たちにとってどのような体験であるのか，学習の当事者の立場から理解でき，今までの図式化された研究を乗り越える必要性を教えてくれる。

例えば，言語学習は社会的・経済的政治学から無関係ではありえない（Norton，2000）ことを具体的な学習者の声を伴って教えてくれる。英語話者の女性たちの日本語学習体験に限定しても，好むと好まざるとにかかわらず，彼女たちが特定の社会的地位に縛られてしまい，そのことが，言語学習自体をいかに難しくし，言語学習への意欲をそいでいるのか，具体的な学習者の声を伴って理解できる（Ogulnick，1998；Cummings，2010）。近年の日本語教育におけるライフストーリーを使った研究の増加の裏には，言語学習という経験を学習者の視点からとらえなおそうという期待があるのではないだろうか。

しかし，ライフストーリー作成を目的としたインタビューをしたとしても，語られたことが理解でき，ストーリー化できるとはかぎらない。インタビューの入門書によれば，インタビューで語られたことが理解できないときは，語り手に問うべきだと言う（桜井，小林，2005）。原則的にはその通りなのだが，実際には，それができない，あるいは不可能だと感じられるときがある。本稿で紹介するOさん（仮名）との調査時，私は，インタビューで語られたことがわからなかったにも関わらず，調査の継続を諦め，質問をしなかった。後述するように，Oさんの話を共感を持って聞けなかったことや，Oさんがインタビューを疎ましく思っているのではないかと感じられたことなどが原因だ。桜井，小林（2005）は，「何度でも，なんでも話せる関係こそがもっとも大切である（p. 17）。」と述べ，調査者と調査協力者の関係がインタビューを成功に導くことを指摘している。

しかし，「何度でも，なんでも話せ」る関係がOさんとの間で確立していたならば，インタビューで生じた「わからない」は解消されたのだろうか。Oさんとの調査を振り返ってみると，た

* 佐賀大学（Eメール：anakayam@cc.saga-u.ac.jp）

とえOさんと「何度でも，なんでも話せる」関係が作れていたとしても，それだけでは解消されないのではないかと思える。

本稿では，Oさんとの調査を取り上げ，「わからない」ことの原因について考えてみる。以下では，まずOさんとの調査について述べる。そして疑問が解消されないままお蔵入りしてしまったOさんの仮のストーリーを取り上げる[1]。次に，なぜOさんとのインタビューがわからなかったのか，フィールドワークや文献調査と組み合わせる必要性，私のストーリー作成の方法の未熟さ，Oさんが語れなかった可能性の3点を取り上げ考える。このようにライフストーリー作成とそのためのインタビューを振り返ることで，ライフストーリーを使った研究を日本語教育学の中でどのように発展させていけるのかを考える一助となるのではないか。

2. Oさんとの調査について

2. 1. 調査概要

2. 1. 1. 調査目的

Oさんとの調査は，日本の大学に通う学部留学生を対象に，大学卒業後の将来の決定に何が大きな役割を果たしているのか，彼らのライフストーリーから探ろうという調査の一環であった。特に，女子学生は将来をどのように決定しているのか，男子学生の場合となんらかの差異があるのかという問いに答えることが課題であった。

2. 1. 2. 調査

Oさんは，ある地方大学（A大学，仮名）の文化系学部に通う中国人女性である。Oさんは，私のクラスの受講者であった。授業中は勉強熱心ではなかったOさんだが，Oさんの書くものには，何か突き抜けたような面白みがあった。Oさんなら，いろんなことを話してくれるかもしれない。私はそう思って，Oさんにインタビューを依頼した。

インタビュー当時，Oさんは20代前半だった。インタビューは，キャンパス内の邪魔の入りにくい場所で，日本語で行われ，Oさんの承諾を得て録音された。文字化は私が行った。1度目のインタビューの後，語られた出来事を時間軸に沿って並べなおし，今回提示する仮のストーリーを作成した。その後，Oさんにストーリーの確認と内容に関する質問をするためのインタビューを再度行った。

2. 2. 第1回インタビュー

Oさんは時間通りに約束場所に現れてくれた。お茶を飲みながら，私は次のようにインタビューを始めた。

中：　なんで日本に来たの？
O：　うふふ，私も知らない。

その後の彼女の話は，私には衝撃だった。私が知っている中国人留学生というのは，学費や生活費のために必要にかられてアルバイトをしており，勉学や夢，自分の楽しみとアルバイトの狭間で苦しんでいるのが普通だった。しかし，彼女はアルバイトの必要のないいわゆる「お金持ち」の出身だった。私は彼女の高校時代や家族の話を聞きながら，「こんな人もいるんだ」と驚いていた。

> 外国人がオーナーをしているレストランで働いているのは楽しいらしいが，これはなぜだろう。早くと言われないからだろうか，Favoriteと言われているからだろうか，仕事がないときは座っていてもいいからだろうか。
> 大学院に行って何をするのだろう？私にとっては大学院は勉強するところだが，Oさんにとっては違うようだ。いい大学の大学院に入らなくてはいけないらしい。なぜ大学に行くのか，なぜ大学院に行くのか。
> どうしてお父さんのことを「すごい」とか「面白い」とか言うのだろう。お父さんのどこがすごくて，面白いのかな？

これは，第1回目のインタビュー後の私のフィールドノートの抜粋だ。インタビューを思い出しながら，私の頭の中にはクエスチョンマークが駆け巡っていた。過去にも，私はライフストーリー作成のためのインタビューを行ってきた。しかし，ここまで疑問符だらけのインタビューは初めてだったと言っていい。

1　Oさんに仮のストーリーを見せた時に，Oさんは，ストーリーの公開を承諾してくれた。本稿作成にあたって，改めて承諾を確認した。

彼女が「面白い」という日本語学校でのエピソードを聞いても，私はそのおもしろさがわからなかった。加えて彼女自身が両親の影響力のもとに置かれており，自分で何がしたいのか考えたり，選んだりしていなかったらしいことも気になった。彼女は，自分の将来について夢を持っていないだけではなく，結婚が自分の人生の終着点であり，「人生はそれで終わり」だと断言した。

ライフストーリーを書く際，私は，語り手の現在の姿が「理解」できるように，過去の出来事を並べるという方法をとってきた（中山, 2009）。現在の調査協力者の姿は，ストーリーの終点である結末となる。そのゴールに向かって過去の出来事を並べていくことによって筋ができる。この筋とは，行動主体，目的，手段，相互作用，状況，予想外の結果などと言った要因の絡み合った全体を組み立てる働きをする。また，結末の働きによって，ストーリー全体を見通せる点が提供され，一つ一つの出来事にその筋に適合した位置が与えられる（リクール，1983/1987）。さらに，多くの場合，過去と現在だけではなく，その延長線上にある未来をも予感させる（フランク，1995/2002）。

つまり，O さんが，自分の現在をどう考えているのかということとともに，彼女の未来は，現在に強く結び付いており，ストーリーを書く際の肝心な点だった。しかし，私には彼女の現在像と将来像をどう理解すればいいのかわからなかった。過去から現在につながる線はぼんやりとしており，未来へのつながりが見えなかった。ジェンダーが一つのトピックだった私は彼女の話を興味深く聞き，なぜそう思うのか強く知りたいと思った。

ともかく，わからない点については，後日聞きなおすことにして O さんが語ったことを時系列に並べ替えて，仮のストーリーを作った。

2. 3. O さんの仮ストーリー[2]

O さんは，都会の比較的裕福な家庭に生まれ育ちました。お母さんは O さんの友だちに尊敬されるビジネスウーマン，O さんのお父さんは旅行や遊ぶことが好きな面白いお父さんです。

O：　母はすごく親切で，でビジネスにも上手。私の高校の友だちは私の母のことを聞いたら，ちょっとスターみたいな感じ。

中：　あーそうなんだ

O：　んん。みんななんか将来もこんな大人の女の人になりたい。でも父は，ちょっと遊ぶが大好きで，（笑）私の父はちょっと面白い人。面白い。母は化粧もしてないし，なんかおしゃれがぜんぜんしてない女の人。

中：　あーそうなんだ

O：　そうですよ。なんか本当に面白い。

O さんの両親，特にお父さんは，O さんのことをとてもかわいがってくれています。お父さんは，ビジネスより旅行が好きで，O さんの誕生日のパーティーで「O には，いつも楽しいことをして笑っていてほしい」と言ってくれました。O さんはとても感動しました。お母さんは，O さんに細くなってほしいと思っています。お母さんは，自分にないものを娘に求めているのだと O さんは思っています。

O さんが高校に入るとき，お父さんが地元で一番いい高校の，授業料の高い「国際部」で学生を募集しているという情報を得てきました。そして，O さんはその学校に通うことになりました。

国際部では，卒業後に英語圏の国に行くコースと日本に行くコースがありました。O さんは英語圏に行くコースに入りたかったのですが，授業料の関係で，日本に行くコースに入らなければなりませんでした。

高校生のとき，O さんは，あまり勉強熱心ではありませんでした。

高校のクラスメートは（O さんと）おんなじで，遊ぶのが大好きで，勉強もぜんぜんやってない。高校はすごく楽しかった。

授業中も先生に見つからないように友だちと遊んでいました。でも，両親が O さんに無理やり勉強をさせようとすることはありませんでした。

O：　父は（O さんの妹さんと）私がなんか毎日いっしょに同じ時間で（車で）送れるように，先生に私の朝の自習をやめた（笑）。すごいでしょ。

中：　朝の自習って，朝早く行くやつ

2　O さんの姿が理解ができていない段階でのストーリーであり，あくまでも仮のものでしかない。

O：　はい。朝はみんな7時30分まで学校に行かなきゃ。私の妹は朝8時ぐらいに学校に行かなきゃ。で，そのとき父は私の朝の自習をやめて，なんか妹が送ったら次，私を学校に送る。幸せだった。みんなより40分ぐらい寝れる。

国際部を卒業したOさんは，当然のように，親元を離れて来日し，国際部が提携を結んでいる日本語学校に入学しました。

その日本語学校は，Oさんのような高校から来た中国人学生ばかりの学校でした。生活のためにアルバイトをしているような学生はいませんでした。日本語学校が終わると，友だちと繁華街に出て，あちらこちらの食べ放題の店に行きました。日本語学校時代で一番おもしろかったことは，先生をだましたことです。

O：　日本語学校のほうで一番面白いことがあります。その学校はみんなは勉強中心で先生はちょっと厳しいです。そのときは私が金髪に染めた（中略）。先生から叱られて黒く染めろと言われた。美容室で染めたから，もう黒く染めたくないと思いますよね。インターネットであれを買った。嘘の髪。

中：　えっ？カツラ？

O：　カツラ。黒いのカツラを買った。でその黒いカツラは短髪で私は本当に楽しかった。本当になんかちょっとクレージー（crazy）かも。学校に行く前は家で自分の黄色の髪をぜんぶ上に上げて，その黒い髪をして学校に行く。先生が見たら，ああいい子ですね，と言われるよね。先生見たら「みんな拍手」って。（友だちは）笑いながらも拍手していました。（中略）三日間ぐらいで先生に見つかりました。

中：　三日間でみつかっちゃったの？

O：　はい。で（笑）その先生はずいぶん怒って（笑）私がバカにしているのか。面白い。

コンビニでのアルバイトも経験しました。いつも同じ時間に来るお客さんがいて，いろいろな話をしました。そのせいで，日本語の聞きとりは上手になったと思います。

大学受験の時，Oさんは3つの大学を受けましたが，A大学しか合格できませんでした。

Oさんにとって，A大学の生活はつまらない生活です。中国人の友だちはみんな生活のためにアルバイトをしていて忙しいし，Oさんといっしょに遊ぶほどお金に余裕がありません。

日本語学校のときは，みんな国から仕送りをしてもらっていた。みんなアルバイトは生活のためじゃなくて，買い物とか本当に楽しいのため，アルバイトをしたりとか。（中略）みんなは時間がいっぱいあって，いっしょに遊んだりとかもよくしました。この大学に入ったら，みんなは生活のためアルバイトをしてる。（中略）この前会った人（日本語学校の人）とは違う。

友だちに誘われて，スーパーの惣菜部でアルバイトもしてみましたが，「早く早く」と言われて，すごくショックでした。

O：　でも料理を作るというよりは，野菜を切ったり，皿を洗ったり，肉を切ったり。本当に，本当に大変だった仕事です。すぐ，なんか3ヶ月ぐらいでやめた。チーフはずっと，早く早く早くっていわれてた。ちょっと頭にくるよね。ここに来るのは留学じゃないみたいな，工場で働いてるみたい（涙）。本当にちょっと大変だった。父とかにも言ってなかった。

中：　言ってなかったの？働いてるって言わなかったの？

O：　うん，その前はたぶん，一度言って，ちょっときついと言いましたで，父はじゃあ辞めてくださいって（笑）言われるよね。

「中国にいるときは，そんな仕事は絶対に」しませんが，3ヶ月の試用期間は終えようと思って，がんばりました。

今は，欧米系の外国人がオーナーをしているレストランで働いています。オーナーは，仕事のないときは，座ってもいいと言うなど優しくて，そこでのバイトは気に入っています。

O：　その店に行ったら，とても欧米のスタイルですごく親切にしてくれた。（中略）（オーナーは）日本語がダメ。英語で。私も英語が上手じゃないのに，ちょっと通じる。

中：　ああ，通じるんだ。
O：　ん本当に，すごく面白い人。なんか，一回も日本語がダメですよって，言われてない。普通の日本人と同じな。本当にいいです。

単位は順調に取れていますが，両親に勧められて決めた専門もおもしろくありません。文化系でも，違う分野だったらよかったと思います。

両親からは「損になることはない」から，最終学歴はいい大学でなければいけないと言われています。O さんは大学院に行くつもりです。A 大学は，いわゆる「いい大学」ではないし，「娘の学歴は完璧であってほしい」と両親が願っているからです。

その後は，絶対に中国に帰ろうと思っています。なるべく両親のいる町に帰りたいと思います。そしていずれは，結婚するでしょう。

O：　大学院に入って，卒業したら国に帰る。
中：　ん。それで？
O：　それで，えっと母の仕事を手伝ったり，たぶん，いや違う。たぶん母は私が自分の仕事をあってほしい。で，結婚とか。たぶんそんな感じで，人生はこれで終わり（笑）
中：　結婚したら終わり？
O：　たぶん終わりですよね。たぶん，後は子どもを生まれ，産んだりとか。たぶん人生は。

2．4．第２回インタビュー

私が彼女に再度インタビューを申し込んだのは，第１回目のインタビューから２ヶ月ほど経ったころだった。仮のストーリーを見せ，私の思い違いがないか確認することと，特になぜ「結婚したら人生が終わり」と感じるのか質問したいと思っていた。その答えによって，ストーリーを書き換えるつもりでいた。

しかしインタビューが始まると，彼女の態度が前回とは違っているように感じられた。用心深く，何を話すべきなのか，考えているようだった。また，お母さんの仕事の役に立つのではないかと厳しいことで有名な先生のゼミを選択していた。そして何よりも，将来像が大きく変わっていた。自分の仕事を持ちたいという希望だけではなく，世界や中国の各地で貧しい人のための奉仕活動に従事したいという話もしていた。何が起こったのだろう。私はびっくりして，尋ねた。

中：　O さん，なんか，この２カ月ぐらいでなんかあった？
O：　何か変わりました？
中：　うん
O：　どれが変わりました？
中：　えっだって，O さんは，大学院卒業したら中国に帰るって言ってて，そのあと結婚するって言ってたんだけど。それで仕事の話は全然しなかったから
O：　そうですか。今はなんか女の人は自分の仕事を持てばかっこいいと思っています。
中：　どんな仕事がいい？
O：　自分の能力を引き出す？全部できる仕事なんか，なんだろう。（沈黙）なんか会社員は，朝9時ぐらいに会社に行って，夜5時ぐらい会社を出ますよね。あの生活は，ロボットロボットみたい。ちょっとつまらないと思います。

腰かけのように仕事をし，「結婚したら人生は終わったと思う」と言った彼女の真意を問うことが第２回目のインタビューの目的の一つだったのに，大きく空振りしたような感覚になった。そして，彼女が取り繕ったストーリーを語っているのではないかと感じられた。また，O さんの両親が O さんの学歴にそこまでこだわるのかという疑問もますます大きくなり，O さんの両親に対する反発が私の中で生まれていた。O さんになぜ，高い学歴を求めるのか，さらに，痩せること，美しくなることを強要するのか。

彼女の将来像の変化については，なぜそれが起こったのかわからなかったが，インタビューで異なった話が語られることはよくあることだ（桜井，小林，2005）し，大学生のころの自分を思い出しても，将来が定まらないことを理解することはできた。しかし，ストーリー化するのは，難しかった。第１回目のインタビューですら，わからないことが多かったのに，将来像まで揺れ続けるのであれば，どうやってストーリー化すればいいのだろう。

私は彼女とのインタビューを続けることを諦めた。彼女の態度の変化から，彼女がインタビューを嫌がっているのではないかと思われたことも一因だ。また，インタビューで語られた内容を共感的に聞けない私自身も非常に嫌だった。そのよう

なインタビューに対する態度は，自分の話をしてくれるOさんに対して，非常に失礼だと思われた。そして，Oさんの仮のストーリーは，お蔵入りすることになった。

3. なぜわからなかったのか

ここで，Oさんとのインタビューで何がわからなかったのかを整理しておこう。まず，インタビューで語られたことがわからなかった。フィールドノートに書いたように，彼女のお父さん，日本語学校でのエピソード，レストランでのアルバイトなど，彼女が「面白い」「すごい」という事柄が，なぜ面白く，すごいのか評価の理由がわからなかったことが最も大きい。また，Oさんの過去と現在および未来を結ぶ線が見えず，ストーリー化を諦めた。このインタビューとストーリー化の失敗の，私とOさんの関係以外の原因は，どこにあるのだろうか。さまざまな原因が考えられようが，ここでは，以下の3点を取り上げる。

3．1．Oさんの世界への接近不足

第1点は，インタビューで語られたことの背後にあるOさんの世界への理解だ。Oさんは，自らのストーリーの中で，自分の両親について多く語っており，Oさんの進路の選択に，両親が大きな影響を与えていることは容易にみてとれる。一方，なぜOさんが自分の父親を「面白い」あるいは「すごい」と評価しているのか，私はわからなかった。このことは，当然，ストーリーを書くことも難しくしていた。

しかし，中国の事情を考慮に入れることによって，以下のように解釈できるのではないかと考えるようになった。

範（2005）は，中国の家庭教育で最も大切なことは，子どもが優れた人材に育つことで，いい学校に行き，いい大学に入学することが人材として世に出る第一歩であると考えられていると紹介している。さらに，このような考え方は，中国の古くからの伝統的な観念に由来しているとしてる（p. 67）。範は，彼女がインタビューした親たちの言葉を引用しながら，「私は自分の子供が勉強だけに専念できれば他には何も要求しない（Wa）」，「家庭の中で彼がすることは一つだけ。それは学習だ（Sh）」，「子供がよく勉強さえすれば，他のことはなんでも満足させる（OX）」等々という考えで一人っ子の親たちは子供に学習以外何もさせない。そして子供がほしいものなどは無理しても買い与える（範，2005，p. 68）と述べている。

つまり，子どもをいい大学に入れることは，中国で広く流通しているマスターナラティブであると言ってもいい。Oさんの両親は，「Oさんの学歴を完璧にしたい」「いい大学に入ってほしい」と願っており，子どもの学歴（大学進学）に対して，過大な期待を寄せている点では，範がインタビューした親たちとOさんの両親は，同じマスターナラティブを生きていると考えてもいいだろう。

この中国の多くの親たちに共有されているマスターナラティブに照らしてみれば，Oさんが自分の父親のことを「すごい」と評価しているのは，自分の父親が，マスターナラティブを体現しているからではないことがわかる。娘の教育にお金を惜しまない一方で，送迎の都合から娘に早朝の補習をさぼらせる。Oさんが父親を「すごい」と評価する理由は，マスターナラティブに束縛されて，嫌なことやつらいことを無理やりしないところにあるのかもしれない。

問題は，私の解釈が成り立つとしても，Oさんの両親のような考え方がどれほど中国国内に流通しているのかわからないということだ。かなり珍しい考え方なのか，あるいは，余裕や機会さえあれば誰でもしたいと考えることなのだろうか。世間の風潮に逆らって生きる父親を「面白い／すごい」と評価しているのか，余裕や機会を上手に使う父親を評価しているのかによって，Oさんの「面白い／すごい」の意味は大きく変わる。つまり，Oさん一家が生きている社会の中での立場や位置について，なんらかのイメージを持たなければ，どのような言動を彼女が「すごい」と評価しているのかはわからないのだ。

またOさんは，「すごい」お父さんの意見に従ってばかりいるわけではない。Oさんは，金銭的必要にかられてではなく，「友だちに誘われて」スーパーでのアルバイトを始めてみたが，彼女にとって非常につらい体験であった。しかし，すぐに辞めることなく，3ヶ月の試用期間が終わるまで勤めている。お父さんの考え方に従えば，興味半分で始めたとしても，「辞めてください」となるのに，なぜOさんは「辛くとも試用期間が終わるまで勤め」たのだろうか。自らが評価するお父さん

の考え方に沿わず，勤め続けることで，何が得られるのだろうか。それがわかるためには，O さんが生きている A 大学の留学生の世界に対する理解を深める必要もあるのかもしれない。

宮内（2010）は，インタビューを使った調査の第 3 のタイプとして，「調査者と被調査者の背後の文脈にまで手を広げ，深めていく方法」を挙げている[3]。インタビューを繰り返し，語られたことからのみ，解釈をするのではなく，「どのような地域社会において，どのような社会構造の中に組み込まれていて，どのような他者とどのような関係を築いているのかについて実際に調べてみること」が必要だとしている。また，石川（2010）は，調査協力者を理解するに際して，「（その人が現在のようになる）過程でどのような他者との関わりがあったのか，いかなる時代的・社会的状況が背後にあるのかを一つひとつ解きほぐすこと（p. 29）」の大切さを説いている[4]。

私は，学部留学生の将来像の形成についての調査の一環として O さんにインタビューを行ったが，ある特定の地域，特定の階層の留学生のみを扱おうとは思っておらず，現代中国のことに対して無知なままであった。また，O さんがどのような留学生生活を送っているのか，インタビュー以外に知ろうとはしていなかった。これが，O さんの語ってくれた内容がわからなかった理由の一つだと考えられるのではないか。

とすれば，O さんの世界を知る努力を重ねる必要があるということになる。この努力を行う必要を認めることは，日本語教育学において，ライフストーリーを使った研究をする際のハードルを上げることでもある。なぜなら，調査者はインタビュー以外の広範な調査を行うことになるからである。これが本当に可能なのかどうか，現在の私には，議論をする資格はない。関連文献を読む，日常的な接触をする，生活の相談にのる。これらの作業は，語られたことを生かす方途の一つである。そのような体験の上でこそ，語られたことの豊穣な意味が明らかになるのではないか。

3. 2. ストーリー化の方法

第 2 点は，ストーリー化の方法だ。私は，上述した通り，現在の姿をゴールとして理解できるように，過去の出来事を並べてストーリーを書いてきた。いわば，過去から現在，そして未来までを線でつなごうとし，つなげられた場合，「ストーリーができた＝理解できた」と考えていた。「X さんは，こういう子どもだった。だから，この道に進み，現在こうである。」私の作ってきたストーリーを振り返ると，多くはこのような流れであることがわかる。逆にいえば，私のライフストーリーを作るという作業は，現在を起点として，川をさかのぼるように過去に向かっていくものである。これは，かなり直線的な理解であったと言ってよい。なぜなら，途中で分岐があったとしても，現在につながるほうを選んで，ストーリーとして再構成するからだ。

O さんの仮のストーリーを再読して気付くことは，彼女の両親が彼女に大きな影響を与えていることとともに，高校進学から大学院進学まで，ほとんどすべての選択が，不可避であるように，あたかも空から降ってきたかのように語られていることだ。それとは対照的に，彼女自身の努力／行動については語られていない。結婚や出産についても然り。彼女の希望は述べられていない。

O さんのような人生を理解するためには，私がそれまでの調査で使ってきた，調査協力者自身の積極的な歩みとして，直線的に人生を理解するというやり方を変える必要があるのではないだろうか。進学や就職，結婚や出産という人生の重大な選択が，自らの意思ではなくどこかからか降りかかってくるように語られる時，幼いころからの調査協力者と現在の彼／彼女を，彼ら自身の主体的な歩みとして直線でつなげることは難しい。それよりむしろ，降りかかる出来事にどのように対処してきたのかという視点で語りを理解することもできるのではないか。言い換えれば，ストーリー化する際の方法を洗練しなければならないのだ。

O さんのように，さまざまに降りかかる出来事のつながりとして人生を語る語り方が，どれだけ一般的なのか現段階では判断することはできないが，さまざまなストーリーの描き方を念頭に置き

3　第一のタイプは「調査票にきわめて忠実な一回限りの対面的な社会調査（p. 59）」，第二のタイプは「被調査者の語りを調査者と被調査者の相互作用の産物としてとらえ（p. 60）」，理解／分析しようとする調査である。

4　この石川の言葉の後には，調査者自身の感情を反省することによって，暗黙裡の想定や常識を相対化することが大切だという言葉が続く。

ながら，インタビューを分析することで，より豊かなストーリーが描けるかもしれない。今後，考察を加えていきたい。

3．3．語り得ないもの

もう一つ，O さん自身が自分の過去と現在をつなげる形で語れなかったという可能性も残されている。第 1 回のインタビューの冒頭で，私の日本留学の理由を問う質問に対して，彼女は，「私も知らない」と答えている。この答えから，私の博士論文執筆時の体験を思い起こす。

私は博士論文執筆に際して，調査開始前に，外国語習得体験に関する私自身のライフストーリー（以下，「私の物語」）を書こうとした。それが質的調査を行う際に，問いを深め，研究者倫理にかなうことだと考えたからだ（Hatch，2002）。しかし，私には書けなかった。あまりにも多くのことが思い出されたからだ。私の中で整理されずにあった数多くの記憶が一度に襲ってくるような感覚だった。一言ずつ書き続けようとしても，結局，ストーリーにはならなかった。私がなぜ日本語教師という職業を選んだのかなど，人から問われたり，自分を納得させるために自分自身に語っていたいくつかのストーリーなら書けたかもしれない。しかし，外国語習得体験については書けなかった。

それが調査が終了し，調査協力者のストーリーを書き，分析が終わるころ，私は自分のストーリーが書けるようになっていた。すべての記憶をストーリーに盛り込むのではなく，決まった分析視覚に合わせるように，記憶を並べていくと，私の子ども時代や家族の歴史，さまざまな体験がつながっていった。

ストーリーが書けたことによって，私は自分の外国語習得体験に対する漠然とした気持ちからは解放された。悲しかったことや嬉しかったこと，悔しかったことやドキドキしたこと。そんな感情の入り混じった「過去のカオス」がすっきり片付いたというのが書いた後の正直な感想だ。

その反面，「私の物語」以外の可能性は閉ざされてしまったという感覚がある。「私の物語」のみが，私のストーリーだとは思わない。他のストーリーを語る可能性もあったのに，それが私の中から消えてしまった。いうなれば，誰も通ったことがない原野に道が開通したおかげで，通りやすくはなったが，行き先は決まってしまったし，道から離れたところに何があるのか，興味を持たなくなってしまったことと同じだった。

浅野（2001）は，自己物語には「語り得ないもの」がはらまれていると主張しているが，「私の物語」に登場しなかった過去は，ストーリーという道から離れたところにあって，誰にも見つけられることなく，ひっそりとしている。もし，それらをストーリーに組み入れようとしたら，道順そのものを変えなければいけなくなるだろう。ひょっとしたら，行き先も変わってしまうかもしれない。「語り得なさ」とは，「まさに自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうようなもの」（浅野，2001，p. 15）なのだ。

もし，O さんが，ストーリーを書く前の私のような状態だったらどうだろう。「私も知らない」という答えは，なぜ日本に来たのか，その理由を過去と現在をつなげる形で語れないという意味だったのかもしれない。それを語ろうとしたら，整理されていない過去と向き合うという辛いインタビューになるかもしれない。私が質問を続けることは，原野に埋もれている記憶を掘り起こすような作業を要求していることと同じことになる可能性もある。あるいは，記憶の片隅にあった過去を思い出してしまったために，O さんの物語自体が変わってしまうかもしれない。その作業を新しい発見があってよかったと思うのか，つらい作業だったと思うのかは，その調査協力者次第だ[5]。そもそも調査だからとそのような作業を強いる権利が調査者である私にはあるのだろうか。インタビューする際，私は自分のこの体験を思い出す。

O さんが様々なことを「おもしろい」「すごい」という言葉で表現していた。もちろん O さんが日本語の第二言語話者であることに留意する必要はあるが，その表現には，雑多な過去が整理されないまま記憶されている可能性を示唆してはいないだろうか。

5　調査依頼の際，私は，プライバシーの保護と調査協力をやめる自由を主に約束してきたが，インタビュー自体がつらい体験になる可能性も述べておく必要があるのではないかと思いいたった。自戒を込めて記す。桜井，小林（2005）には，同意書には「ライフストーリー・インタビューによって気持ちが整理されたり癒されるだけでなく，気持ちが沈む場合もありうること」を記載すること（p. 23）が述べられている。

4. おわりにかえて

Oさんのインタビューがわからず，ストーリー化できなかった原因として，私がOさんの世界を十分に理解していなかったこと，ストーリーの作成方法が洗練されていなかったこと，さらにOさんが語れなかった可能性の3点について考察を加えてきた。

本稿で確認できたことは，調査者と調査協力者との関係や，インタビュー以外で行う調査の質，さらに分析方法の質など調査者の「器の大きさ」によって，インタビューやライフストーリーが大きく左右されるということだ。まさに，「調査者のバイアスや経験，専門的知識，洞察は，すべて構成され刻み込まれた意味の一部（グリーン，2000/2006，p. 372）」なのだ。

このことを前提としつつ，日本語教育学はライフストーリーを使った研究によって，何を明らかにしていくのか，どのような課題に取り組んでいくべきなのか，今後議論が必要であろう[6]。それは，日本語教育学とは何かという大きな問いにつながるのではないか。

文献

浅野智彦（2001）.『自己の物語的探究 ── 家族療法から社会学へ』勁草書房.

石川良子（2010）.「分からないことが分かる」ということ ── 調査協力者への共感をめぐって『質的心理学フォーラム』1，23-31.

グリーン，J. C.（2006）. 評価による社会的プログラムの理解. デンジン，N. K.，リンカン，Y. S.（編），平山満義（監訳）『質的研究資料の収集と解釈（質的研究ハンドブック　3）』（pp. 367-384）北大路書房（原典，2000）.

桜井厚，小林多寿子（編）（2005）.『ライフストーリー・インタビュー ── 質的研究入門』せりか書房.

中山亜紀子（2009）.『「日本語を話す私」と自分らしさ ── 韓国人留学生のライフストーリー』大阪大学博士学位論文（未公刊）.

範玉梅（2005）. 日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題『阪大日本語研究』17，59-90.

フランク，A.（2002）. 鈴木智之（訳）『傷ついた物語の語り手 ── 体・病・倫理』ゆみる出版（Frank, A. W. (1995). *The wounded storyteller: Body, illness, and ethics*. The University of Chicago Press.）.

宮内洋（2010）. インタビューにおける語りの扱いの相違 ── ある女性の〈非科学的〉な語りをもとに『質的心理学フォーラム』1，58-65.

やまだようこ（2000）. 人生を物語ることの意味 ── ライフストーリーの心理学. やまだようこ（編）『人生を物語る ── 生成のライフストーリー』（pp. 1-38）ミネルヴァ書房.

リクール，P.（1987）. 久米博（訳）『時間と物語1 ── 物語と時間性の循環／歴史と物語』新曜社（Ricœur, P. (1983). *Temps et récit. Tome I: L'intrigue et le récit historique*. Le Seuil.）.

Cummings, M. C. (2010). Minna no Nihongo? Nai! In D. Nunan & J. Choi (Eds.), *Language and culture: Reflective narratives and the emergence of identity*. New York, NY: Routledge.

Hatch, A. J. (2002). *Doing qualitative research in education settings*. Albany, NY: State University of New York Press.

Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. London: Longman.

Nunan, D., & Choi, J. (Eds.). (2010). *Language and culture: Reflective narratives and the emergence of identity*. New York, NY: Routledge.

Ogulnick, K. (1998). *Onna Rashiku: The diary of language learner in Japan*. Albany, NY: State University of New York Press.

謝辞：仮のストーリーの公開を認めてくれたOさんに感謝します。本稿の草稿の段階で，久野弓枝氏から有益なコメントをいただきました。本研究はJSPS科研費25370594の助成を受けたものです。

6　ライフストーリーを使った先行研究や手引書が数多く出されている心理学や社会学では，典型事例の提示や類型化，「モデル構成によって一般化をめざす（やまだ，2000）」場合と，「社会問題差別」や「周縁にいて注目されなかった人々への関心」から研究を始める場合（桜井，小林，2005）によって，ライフストーリーの扱い方そのものが異なっている。